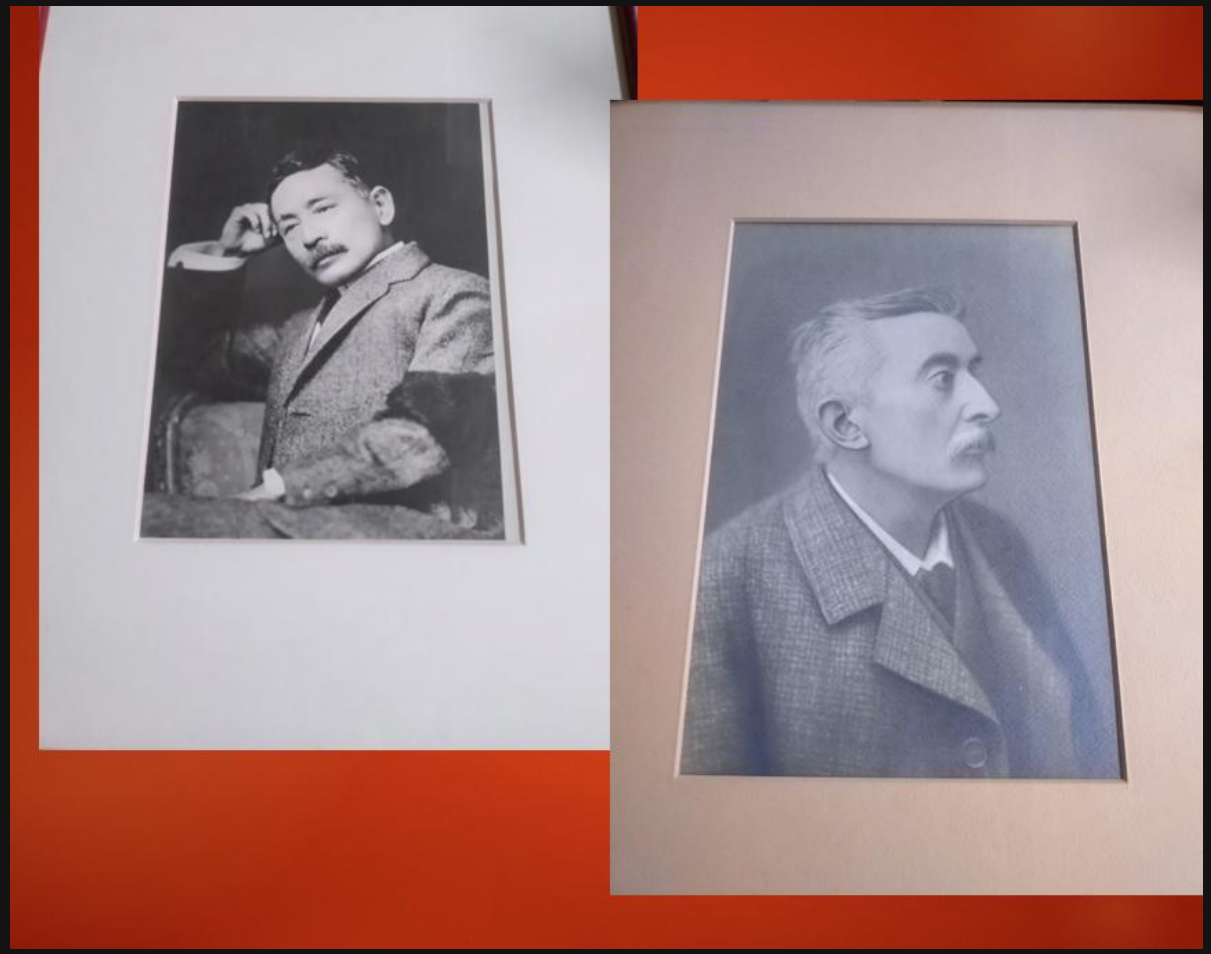
英語英米文学研究室



概要

英文専修の中身は、**英語学、英文学、アメリカ文学**に分かれている。学生のみなさんには三分野のうちいずれか、好みの専門の勉強におおむね集中できる仕組みとなっている。自分で選んだ分野で卒業論文を仕上げるのが英文ライフのクライマックス。分量は、英語の場合 7,500 語程度、日本語の場合 20,000 字程度で、この山を越えたら、英文ライフは「あがり」となる。

専門領域

- **英語学**は様々な分野に分かれるが、どの分野の研究をするにせよ、**言語の一般的性質・仕組み**について正確な理解をもつ必要がある。そのため、授業では、英語の詳細な事実と、その理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点をおく。その際、日本語との比較も可能な限り試みる。
- **英米文学**は、英米に限らない**英語圏全般**の文学作品(詩、小説、演劇、批評など)を対象とする。**作品テクストの精読と解釈**を不動の出発点としつつ、その背景にある歴史をさかのぼって当時の社会や文化の動向に考察の対象を広げることもあれば、児童文学・大衆文学などのいわゆるサブ・ジャンル、あるいは文学と美術や音楽との諸関係などへと射程を広げることもある。

卒論提出までのスケジュール

３年次

10月　　論文指導演習

４年次

4月　　卒論アンケート提出：卒論で取り扱う分野・テーマ、指導教員の希望など

5月　　指導教員発表

10月　中間発表

11月　卒業・留年見込届提出

1月　　卒論提出：英文研究室へは紙媒体1部とPDFファイルを提出

2月　　口頭試問

これまでに提出された卒論題目（例）

英米文学

The Ending of *Adventures of Huckleberry Finn* （『ハックルベリー・フィンの冒険』の結末）

A Study of the Narrative of *Winesburg, Ohio* （『ワインズバーグ、オハイオ』における語りの研究）

Narrative and Context in Poe's "Ligeia" (Poeの "Ligeia" における語りとコンテキスト)

What Ishiguro expresses through Stevens in *The Remains of the Day*（『日の名残り』でイシグロがスティーブンスを通して描いたものについて）

Loquacious and Obscene Portnoy: The Self-Conscious Discourse of an Intellectual Jew（饒舌で猥褻なポートノイ：知識階級に属するユダヤ人の自意識によるディスクール）

Narrative and Vision in *The Turn of the Screw*（『ねじの回転』における語りと視覚）

Pride and Prejudice: The Presentation of a New Type of Heroine（*Pride and Prejudice*における新たなヒロイン像の提示について）

Caroline Compson as the Mother in *The Sound and the Fury*（『響きと怒り』におけるキャロライン・コンプソンの母としてのあり方）

A Study of *The Sound and the Fury*: On Jason Compson, his Love and Fury（『響きと怒り』研究：ジェイソン・コンプソンの「愛と怒り」）

Unreliable Narrator and Literary Realism in *The Remains of the Day*（『日の名残り』における信頼できない語り手とリアリズム）

The Comedic Element of Misunderstanding of *Emma*（*Emma*における勘違いの喜劇的要素について）

The Comedic Element of Misunderstanding of *Emma*（*Emma*における勘違いの喜劇的要素について）

Peer Pressure and Exclusion in *Brave New World* and *Ninety Eighty-Four*（『すばらしい新世界』と『1984年』における同調圧力と排除）

Juliet in Control: A Young Woman's Strive and Ultimate Win（ジュリエットによる支配：若い女性の葛藤と勝利について）

A Study of the Jewishness in *Goodbye, Columbus*（『さようならコロンバス』におけるユダヤ性）

Literacy and Esther's Character in *Bleak House*（*Bleak House*におけるリテラシーの意識とEsther像）

What Is Wrong with Nelly Dean?: The Sense of Order in Emily Brontë's *Wuthering Heights*（ネリー・ディーンの特殊性：エミリ・ブロンテ『嵐が丘』における秩序感覚）

Bernard's Narrative Failure in *The Waves*（『波』におけるバーナードの語りの失敗）

Views on love in *The Taming of the Shrew* and *Kiss Me, Kate*（『じゃじゃ馬ならし』と『キスミーケイト』における恋愛観）

A Study of *Adventures of Huckleberry Finn*: On Huck and Jim's Separation and Reunions（離合から見る『ハックルベリ―・フィンの冒険』）

英語学

Erroneous Use of Past Participles by Japanese Learners of English（日本人英語学習者による過去分詞の誤用について）

The Comparison of Comparative Correlative Constructions in English and Japanese（日本語と英語における比較相関構文の分析）

A Study on Classification of Japanese Indirect Passives（日本語間接受動の分類について）

卒業後の進路　～　全体的傾向

◇主な進路

・「大学院進学」～　東京大学大学院 人文社会系研究科（欧米系文化研究専攻 英語英米文学専門分野）や、内外の大学院へ進学して研究者を志す。

- 「民間企業」～　言語能力と論理的思考力を生かし、業界を問わず大手企業やグローバル企業を中心に多岐にわたる分野への就職。
- 「公務員・教育関係」～　語学力を武器に公務員試験を受験したり、教員免許を取得するなど。

主な就職先分野・業界

メディア・出版・放送

講談社、集英社、KADOKAWAなどの出版社や、NHK、民放各局、読売新聞社、朝日新聞社など。

IT・通信・Webサービス

Google、NTTデータ、楽天、Yahoo!（LINEヤフー）など。

コンサルティング・シンクタンク

アクセンチュア、野村総合研究所など。

金融・保険・メーカー

三菱UFJ銀行、三井住友銀行、東京海上日動火災保険、メーカー。

公務員・教育

外務省をはじめとする国家公務員、自治体職員、中高の英語教員（英語教員免許を取得して教職に就くケース）など。

特長・強み

◇グローバルな視点と語学力

「英語が話せる」だけでなく、英米の文化・歴史・文学を通じた深い教養と高度な読解力（Academic Writing / Reading）が身につくため、海外取引やグローバル展開を行う企業で高く評価される。

◇テキスト分析力・論理的思考力

文学作品や膨大な英語文献を読み解き、自身の考えを論理的に表現する訓練を積むため、コンサルティングやメディア・企画職などの職種にも親和性があります。

英語学

渡邉　明　（英語学）

Akira Watanabe



統語理論が専門。最近は形容詞や名詞の下位分類が統語構造にどのような影響を与えるかという問題を中心に研究をすすめている。授業では、さまざまなレベルにおいて、理論の基礎をおさえていくようにしたい。理論的研究というものは、（素人がよく誤解するように）一時のはやりすたりではなく、長年の積み重ねの中から生まれてくる重要な問題をいかに解決するかがその本質である。そのような研究伝統を身につけ、理解に努めるのが授業の主目標となる。そこから、どのようにして新しいものを創り出していくかは、それぞれの努力と工夫次第ということになる。

中尾　千鶴　（英語学）

Chizuru Nakao



専門は生成文法統語論。言語における文法規則の言語間変異を、主に日本語と英語の比較を通して探っている。特に、文における語の移動や語の削除（省略）の規則について、それぞれの構文がどのような場合に認可されたりされなかったりするのかを言語ごとに考察している。また、子供がどのようにそれぞれの母語の規則を習得するか、子供の文法と大人の文法がどのように異なっているかといった言語獲得に関する問いにも興味がある。

イギリス文学

阿部　公彦　（イギリス文学）Masahiko Abe



英米詩を主要研究対象としつつ、小説や批評にも関心領域を広げている。文学作品の精読を通して、「なぜ人は頼まれてもいないのに語ろうとするのか」「文学作品の言葉は、どこが特殊なのか？　事務処理の言葉とはどうちがうのか？」といった根源的な問いを立て、そこから「思わず言うつもりでないことを言うとはどういうことか」「なぜ小説では漏れ聞こえた会話が大きな役割を果たすのか」といった個別論にも踏みこんでいくことで文学研究を社会に向けてひらこうと努力している。

Barnaby Ralph （イギリス文学）



My main research interest is to do with early modern literature, culture, and comparative aesthetics in Britain. To that end, I often work with rhetorical texts from the seventeenth and eighteenth centuries, which offer useful insights into not only novels, plays, and poetry, but also a broader range of arts such as music, painting, and architecture. Aside from this, my teaching includes courses on critical theory, regional literatures, writing technique, and research methodologies at both the undergraduate and postgraduate levels.

アメリカ文学



諏訪部　浩一　（アメリカ文学）

Koichi Suwabe

アメリカの20世紀小説を主な研究対象としてきたが、そもそも小説とはいったい何なのかという大問題に関心があり、したがって19世紀小説を無視しているわけではない。この「大問題」を、個々の文学作品をどうすれば面白く読めるかという実践において考えるのが、当面の方針ということになる。教員の「文学」へのそのような関心は、授業にも当然反映されることにはなるが、それぞれの作品を、それぞれに相応しいスタンスを模索しつつ読んでいく以上、アプローチは限定的というより包括的となるはずであり、そのようにいわば柔軟性を強制する形で受講生自身の問題意識を拡大深化させることを目標としたいと思っている。

助教／嘱託

坂元　美樹也（助教・英文学）

Mikiya Sakamoto

- 宮川　美也子（事務補佐員）
  Miyako Miyagawa